

(右)ユネスコ登録後、秋田県男鹿市のナマハゲをはじめ、他地域の来訪神保存協会との交流もますます盛んに。

(左)ユネスコ無形文化遺産への登録決定の報を受け、喜ぶ熊谷市長(中央右)と保存会メンバー。



奇祭と称される火伏の行事
毎年2月の初午の日に行われる「米川の水かぶり」は、登米市東和町米川の五日町地区に古くから伝わる火伏行事です。地域にゆかりのある男衆が参加し、早朝、「水かぶり宿」で身支度を整えることから行事は始まります。男衆は裸体の腰と肩に「しめなわ」を巻き、頭から「あたま」をかぶって「わつか」で押さえ、足にはわらじを履き、顔にはかまどの黒いすすを塗った火の神様の使いの姿で宿を出立し、法輪山大慈寺の秋葉大権現様や諏訪森大慈寺跡を巡って火伏を祈願したあと、町を練り歩きます。男衆が家々の前に用意された水を屋根にかけながら、町中を南から北に走り抜ける姿が行事のクライマックス。一行が通りかかると、群衆たちはわら装束のわらを競って抜き取り、火伏のお守りとして大切に持ち帰ります。

奇祭と称される火伏の行事
毎年2月の初午の日に行われる「米川の水かぶり」は、登米市東和町米川の五日町地区に古くから伝わる火伏行事です。地域にゆかりのある男衆が参加し、早朝、「水かぶり宿」で身支度を整えることから行事は始まります。男衆は裸体の腰と肩に「しめなわ」を巻き、頭から「あたま」をかぶって「わつか」で押さえ、足にはわらじを履き、顔にはかまどの黒いすすを塗った火の神様の使いの姿で宿を出立し、法輪山大慈寺の秋葉大権現様や諏訪森大慈寺跡を巡って火伏を祈願したあと、町を練り歩きます。男衆が家々の前に用意された水を屋根にかけながら、町中を南から北に走り抜ける姿が行事のクライマックス。一行が通りかかると、群衆たちはわら装束のわらを競って抜き取り、火伏のお守りとして大切に持ち帰ります。

「米川の水かぶり」は、1991(平成3)年に県民俗文化財に、2000(平成12)年には国の重要無形民俗文化財に指定されました。そして昨年12月、「来訪神 仮面・仮装の神々」の国内10行事の一つとしてユネスコ無形文化遺産に登録され、大きな話題を呼んだのは記憶に新しいところです。

「米川の水かぶり」の伝統継承活動を行っているのが、五日町町内会を母体とする米川の水かぶり保存会です。先祖代々、「水かぶり宿」を務めてきた会長の菅原淳一さんは、伝統継承活動の中心を担ってきたお一人。「古くから地域の先人により伝えられてきた『米川の水かぶり』はいわば地域の宝です。それがユネスコ無形文化遺産という、日本を代表する世界の文化財の一つとして認められたことに、喜びと共に身の引き締まる思いです」と、継承への責任の大きさを改めて実感しているそうです。ユネスコ登録後、初めて行われた今年の「米川の水かぶり」には、過去最高となる5000人が来場。注目度の高さをうかがわせることができました。

「米川の水かぶり」の伝統継承活動を行っているのが、五日町町内会を母体とする米川の水かぶり保存会です。先祖代々、「水かぶり宿」を務めてきた会長の菅原淳一さんは、伝統継承活動の中心を担ってきたお一人。「古くから地域の先人により伝えられてきた『米川の水かぶり』はいわば地域の宝です。それがユネスコ無形文化遺産という、日本を代表する世界の文化財の一つとして認められたことに、喜びと共に身の引き締まる思いです」と、継承への責任の大きさを改めて実感しているそうです。ユネスコ登録後、初めて行われた今年の「米川の水かぶり」には、過去最高となる5000人が来場。注目度の高さをうかがわせることができました。



(上)「昔ながらの素朴さが残る行事です」と魅力を語る菅原さん。

(左)今年の行事の様子。沿道には大勢の観光客が詰め寄せました。



地域で守り続けられてきた行事を大切に受け継ぐ責任を実感

米川の水かぶり
保存会



ふるさと応援の善意が育む 子どもたちが音楽を楽しむ力

登米市立
石越小学校



(上) 地域社会との交流により生徒の学びの場が広がった石越小学校。
(左) 秋の学習発表会や定期演奏会に向けて練習中の部員のみなさん。

地域と共に子どもたちを育成

登米市の最北端に位置する登米市立石越小学校は、開校146年を迎える歴史ある小学校です。現在は196名の児童が在籍しています。

地域に伝わる伝統芸能「長下田神楽」の一種である「鳥舞」を、地区のボランティアを招いて教わるなど、もともと地域コミュニティとのつながりを大切にしてきた同校。昨年、コミュニティ・スクールの指定を受けたことで、より保護者や地域との信頼関係が密になりました。「放課後学習や地域の見守り、読み聞かせなど、さまざまな場面で地域の支援ボランティアさんのお力をお借りしています。昨年度は一年間で延べ453名のボランティアさんに学校活動に関わっていただきました」と語るのは、小松祐治校長です。「これからも地域の方々と共に、石越の将来を担う子どもたちを一緒に育てていければと思っております」。

音楽の素晴らしさを届けたい

そんな石越小学校が伝統的に力を入れているのが吹奏楽です。小学校の吹奏楽部としては登米市で最も古く、約40年の歴史を持つという石越小学校吹奏楽部。毎年夏に開催される吹奏楽コンクール宮城県大会に出場し、昨年は銀賞を受

賞するなど、県北の強豪校として名を馳せています。

現在は3年生から6年生まで31名が所属。指導するのは、今年同校に赴任してきた佐藤まゆみ先生です。大会での好成績以上に、子どもたち一人ひとりが音楽を慈しみ、たくさんの人に音楽の楽しさを伝えられるような指導を目指しており、夏祭りや地区民運動会といった地元イベントにも積極的に参加しています。「地域の方々に日ごろの練習の成果を披露して喜んでいただくことが、地域への恩返しにもなります」と佐藤先生。子どもたちの意欲を高めるため、演奏する曲目もできる限り自分たちで選ばせているそうです。

そんな子どもたちが使う楽器は、消耗品といっても過言ではありません。「子どもは扱いに不慣れな上、使い手も毎年変わるため、長持ちさせるのはなかなか難しいところがあります」と佐藤先生。そこで今年から、楽器の購入費用の一部にふるさと応援寄附金が充てられるようになりました。「楽器は高価なものですから、寄附金の存在は非常にありがたいですね。いただいた楽器を大切に使い、音楽の楽しさをより多くの人に届けるために役立てていきたいと思えます」。

真新しい楽器を手に、いきいきと練習に励む子どもたちの姿は、きらきらと輝いて見えました。



(右) タクトを振る佐藤先生。自主性を伸ばす指導を心がけています。
(左) 新しい楽器を手に笑顔を見せる小野寺未姫さん(クラリネット)と山本愛来さん(アルトサックス)。



(右)家族や職場ぐるみでの和気あいあいとした応援が会場を盛り上げます。

(左)数日後に迫った開催に向け、ボートの整備に余念がない実行委員会の片倉さん。



登米市民による水上運動会

「長沼レガッタ」は、1990(平成2)年、長沼ボート場でインターハイが開催されたのを機に、旧迫町の町民レガッタとして始まったボートレース。毎年9月の日曜日に実施されており、今年で30回を数える名物イベントです。

「登米市内に居住、または勤務する人なら誰でも参加可能で、競技会とはひと味違ったアットホームな雰囲気が特徴のボート大会です」と話すのは、長沼レガッタ実行委員会事務局長の片倉孝仁さん。参加希望者には市が所有するボートを貸し出すほか、事前講習会も開催しており、初心者でも気軽にチャレンジできるのが魅力で、毎年300人超の市民が参加しています。そもそもの開催の目的は、「環境の良い長沼ボート場を、地域の方々に使ってもらおう機会を作る」ことだったのだとか。長沼ボート場は、国内で唯一の常設2000凹コースを備え、過去にはオリンピック予選を兼ねたアジア大会も開催されるなど、日本最高峰のボートコースとして知られています。「ボートは日本一のコースを持つ登米市だからこそできるスポーツ。『長沼レガッタ』を通して、ボートの楽しさをたくさんの市民に伝えたいですね。そして、水上から見る長沼の景色の美しさをぜひ体感していただければ」と片倉さんは語ります。

国内最高峰のボート場を舞台に 繰り広げられる市民レガッタ

ますます影響の大きな大会に

近年、「長沼レガッタ」は新たな広がりを見せています。2年前に秋田県由利本荘市を会場に開かれた「全国市町村交流レガッタ」に登米市チームが参戦した縁で、今年の長沼レガッタには同市から2チームがオープン参加するなど、ボートを通じた他地域との交流が盛んに。また、同じく2年前からは「全国市町村交流レガッタ」の代表選考会を兼ねる大会、という位置づけも加わりました。

「長沼レガッタ」の開催運営費には、出場者の参加料や地元企業からの協賛金のほか、ふるさと応援寄附金が充てられています。「みなさんからの寄附があつてこそ開催できる大会です。寄附してくださった方々のためにも、もっと大会を盛り上げていきたいですね」と語る片倉さん。「観戦にご招待したり、エキシビジョンレースに参加していただくなど、寄附してくださった方と触れ合える取り組みも模索中です」。

昨年9月にはボート場のほとりに宿泊設備も備える「長沼ボート場クラブハウス」も誕生。30回の節目を迎えた「長沼レガッタ」は、今後さらに影響力の大きな大会へと発展していくこと目指す。



(上)ハイスペックな拠点施設「長沼ボート場クラブハウス」。

(左)今年9月22日(日)に開催。「ナックルフォア」「カヌー」の2種目で競われました。

長沼レガッタ
実行委員会



とめの自慢を
ピックアップして
ご紹介します!

聞かせて!

とめ 登米自慢

宮城県登米市



4 渡り鳥、ゲンジボタルが舞う豊かな自然

ラムサール条約登録湿地「伊豆沼・内沼」は多種多様な生物が息する渡り鳥の楽園です。他にも、ゲンジボタルが群生する鱒淵川など貴重な自然が数多く残っています。

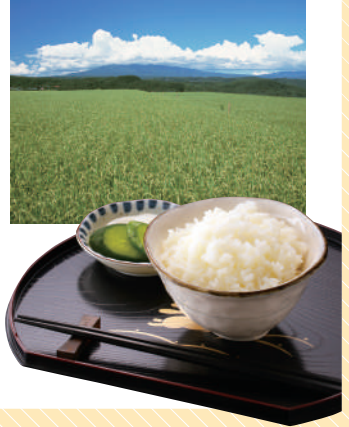
毎年7月上旬に見られる
ゲンジボタルの乱舞



1 環境保全米発祥の地

豊かな自然と安全・安心な食を未来へ引き継ぐため、自然との共存を目指した「環境保全型農業」を推進しています。「赤とんぼが乱舞する産地を目指そう」を合言葉にスタートした「環境保全米」の栽培は、登米市が発祥の地です。

農薬や化学肥料をできるだけ減らし、産地や栽培方法を証明する「栽培履歴簿」の記帳をはじめ、食味調査、DNA鑑定、残留農薬分析などを実施した安全で安心なお米です。



5 宮城県初の森林セラピー基地

登米市は、森林資源も豊かで、総面積の4割強が森林で占められ、「杉」の産地としても有名です。

宮城県で唯一、森林セラピー基地として認定されている「登米ふれあいの森」の園内には、8つの散策コースが整備され、四季折々の景色を楽しみながらの散策は、森林が持つ癒しの効果を十分に体感することができます。



2 全国トップレベルの味と質「登米産牛」

登米市の「肉用牛」の生産量は東北随一であり、2017年の肉用牛市町村別産出額は約87億円で、本州で1位、全国で8位になりました。登米市で飼育されている肉用牛の多くは黒毛和牛で、一定以上の条件を満たした上質なものは、超高級ブランド牛肉「仙台牛」として出荷されています。

なお、平成29年度に開催された「第11回全国和牛能力共進会宮城大会」第2区部門において、登米市の畜産農家が日本一に当たる賞を獲得しました。

「仙台牛」とは

㈱日本食肉格付協会が行う「枝肉取引規格」という日本全国共通の基準に基づいたランク付けで、肉質等級「5」と評されたものだけが名乗ることができる、超高級ブランド牛肉「仙台牛」。その約4割が登米地域産です。



6 ユネスコ無形文化遺産「米川の水かぶり」

「米川の水かぶり」は、ユネスコ無形文化遺産「来訪神 仮面・仮装の神々」の来訪神行事であり、国の重要無形民俗文化財にも指定されています。800年以上の歴史と伝統を誇る火伏せ行事「米川の水かぶり」は、毎年2月の初午（はつうま）の日に東和町米川地区で開催されます。

地区の男だけが参加することのできる行事で、かまどのすすを顔に塗り、わらで作った水かぶり装束を身にまとい、大慈寺境内にある秋葉大権現に火伏せを祈願します。お神酒を頂いて神の使いとなった一行は、奇声をあげて各家庭の屋根に向かってバケツやおけの水をかけながら町を練り歩きます。地域の人たちは一行の纏っている装束からわらを抜きとり、それを自宅の屋根に投げ上げ火難除けのお守りとしています。



3 日本有数のボート場

「長沼ボート場」は、全国でも4か所しかない国際A級コースの優れた競技環境を持つボート競技場です。全国各地のボート選手が、練習や強化合宿、大会競技などで訪れるほか、子どもたちをはじめとした市民が海洋性スポーツを気軽に楽しめる交流施設として、多くの方々に利用され親しまれています。

8月には、「長沼はすまつり」が開催され、湖面いっぱいに咲くハスを楽しむことができます。



【お問い合わせ】

登米市総務部総務課

〒987-0511 宮城県登米市迫町佐沼字中江二丁目6番地1

TEL 0220-22-2091 FAX 0220-22-3328

http://www.city.tome.miyagi.jp E-MAIL somu-somu@city.tome.miyagi.jp

発行日/令和元年10月



宮城県登米市



登米市シェアプロモーション
ロゴマーク



登米市ホームページ